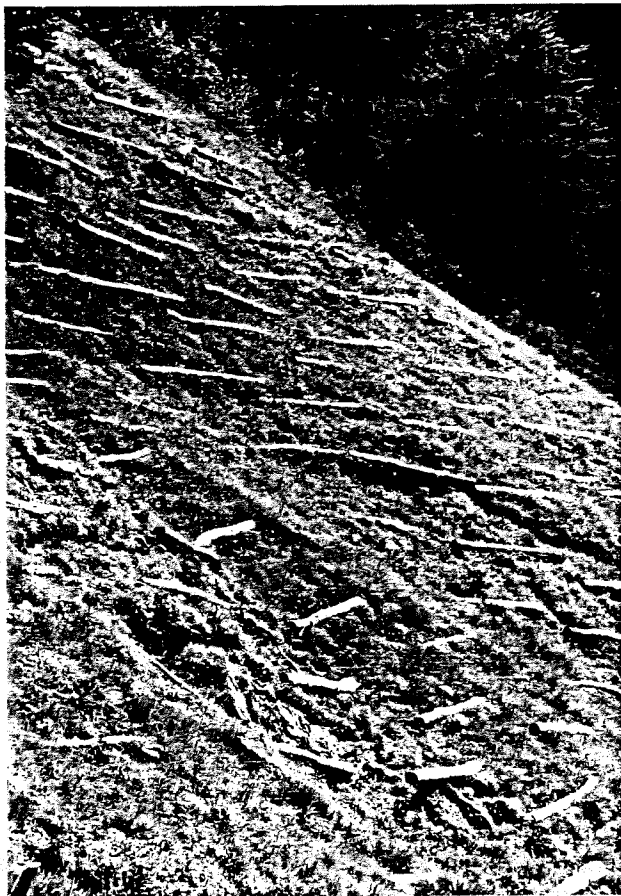


雪崩分科会レター

No. 4 (1989年1月)

日本雪氷学会雪崩分科会



写真：雪崩防止林造成のため、多数の丸太を急斜面に横に固定して、積雪グライドの軽減を図る。(スイス)

新田隆三氏提供

富山大学理学部

川田邦夫気付

1. 昭和63年度雪崩分科会活動

1) 総会

昭和63年10月24日(月)18時30分～20時30分、日本雪氷学会全国大会が東京の日本教育会館一ツ橋ホールで開催された折に分科会総会が開かれた。出席者は約30名であった。以下はその内容である。

- ・任期に伴う分科会幹事の選出では従来の役員が全員そのまま留任して、あと2年続けることになった。
- ・No.2、No.3ニュースレターの発行。
- ・雪氷辞典編集委員に分科会側から成田英器氏が委員として出ています。
- ・1988年現在、分科会の会員は個人83名、団体16団体となっています。
- ・昭和63年度会計決算報告；

(昭和63年9月30日現在)

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
前年度繰越金	44,588	文具	1,100
会費(個人会員)1,000×6	6,000	切手	1,600
会費(団体会員)2,000×2	4,000	郵送料	710
寄付金	1,000	書留郵送料	840
預金利息	37	分科会レター-No.2発送	13,960
		分科会レター-No.3発送	10,000
合計	55,625	合計	28,210

$$\text{収入} - \text{支出} = 55,625 - 28,210 = 27,415 \text{ 円}$$

2) 話題提供

分科会総会の後、今年度は「海外の雪崩研究動向」について、三人の講演者から話題の提供があった。話題内容と提供者は以下の通りである。

(1) スイス連邦工科大学における雪崩研究

納口 恭明 (科学技術庁長岡雪氷防災実験研究所)

スイス連邦工科大学に1年間滞在していた話題提供者が、最近スイス連邦工科大学で行われている雪崩の研究を紹介した。この中で、流れ型雪崩の基礎として有限粒体流の理論・計算機シミュレーション・室内実験とポリスチ

レンの粉末を使った煙型雪崩のモデル実験が主に紹介された。

(2) 東アルプスの雪崩対策

新田 隆三 (農林水産省森林総合研究所)

東アルプスとはオーストリアを中心とする地域である。1988年7月上旬、オーストリアのグラーツ市で国際自然災害シンポジウム (Interpraevent 1988) が開催された。洪水、土石災害、雪崩などをテーマに4年に一度開かれるこの会議は、今回参加者総数560名、日本からの参加は40余名であった。

このシンポジウムの EXCURSION (木製雪崩予防柵など)、新田個人による SALZBURG 州の雪崩予報機関訪問、同州 OBERTAUERN の各種雪崩防止工事見学、さらにはスイス ANDERMATT 雪崩防止林見学の要点をスライドを用いて紹介した。

(3) ノルウェーでの国際シンポジウム報告

川田 邦夫 (富山大学理学部)

1988年9月4日～9日、Norway の Lom で「生活環境に関わる雪と氷河研究のシンポジウム」が開かれた。参加者は15ヶ国、93名で日本からの出席者数は11名であった。シンポジウムでは主に吹雪、雪崩や氷河に関する発表が多く、ポスターセッション、半日 EXCURSION を含め 5日間にわたって熱心な討論が行われた。

終了後にあった EXCURSION は氷河と雪崩の二つのグループに別れたので、私は雪崩グループに加わり、山岳地道路沿いの雪崩被災地やフィヨルド沿いの道路や集落地での雪崩対策工を見学してきた。これらのいくつかをスライドを用いて紹介した。

2. 会員の広場

* 熊谷 晃

連絡先:

山形県土木砂防課

<雪と氷とのつき合い> 盛岡生まれの盛岡育ちのため、雪の力学を勉強しないのに雪むろ (かまくら) を作って遊び、田圃に水を張ってスケートで遊ぶ。

<雪崩とのつき合い> 大学に入って山岳部に所属した時に始まる。冬は表層雪崩に心配し春は底雪崩に、雪底の踏み外しにおののきながらも重い大きなリュックを背に亀のように歩き回った。

<現在の仕事と雪崩> 砂防関係の仕事の中で、急傾斜地崩壊対策事業 (かけ崩れ対策) における法面の雪崩対策及び、集落保全を目的とした雪崩対策、そうして最近では、雪対策を目的とした砂防事業を担当。

* 石本敬志

連絡先: [REDACTED]

開発土木研究所

北海道の国道沿線で、10年で100件程度の斜面積雪の崩落が発生しています。発生地点の殆どは標高が100m以下の海岸段丘を通る切り土区間です。規模が小さく雪崩と呼べないかもしれませんが、道路を安全に保つうえで無視できません。正確な実態把握のために調査を始めています。

* 新田隆三

連絡先: [REDACTED]

農林水産省森林総合研究所

<私の近況から> 昭63.4.13 富士山で高度差1500m前後の大雪崩が多発。雪崩跡を安間荘博士に案内していただき、富士山の自然の多様な姿に興奮した4月でした。地震計に20本前後の雪崩振動波形が記録され、落合博貴氏（森林総研）によりそれらの特徴が明かにされたのも楽しいことでした。

7月には学会がらみでオーストリア、スイスに3週間の旅。SALZBURG州の雪崩対策見学など後半2週間の1人旅での収穫は大きかったのですが、帰国後約3ヶ月は体が不調。トシなんですネ。

11~12月は、富山県平村、上平村、北上~横手等の雪崩防止林を訪れる。木曾駒付近の山岳雪崩調査にはいる、etc.。

64年にはドイツ語の辞書と格闘して、素晴らしいチロルの「LAWINEN HANDBUCH」（雪崩ハンドブック）完訳に挑戦です。

* 野表昌夫

連絡先: [REDACTED]

新潟県林業試験場

雪崩関係の仕事に着手して10年になります。植栽樹種、植栽方法、保育方法などについて研究しています。いかに早く雪崩防止機能を持った森林をつくることのできるかがテーマですが、対象地は立地条件も厳しいので、時間のかかる仕事です。

* 四手井綱英

連絡先: [REDACTED]

目下、建設省の多雪地の雪崩の危険のある集落の雪崩防止についての諸条例や法的な規制等々について、意見を述べる会合にでています。なかなか面白い会合で色々な専門家が集まっています。近く答申を出す段階になり、その後皆様の意見も聞くことになりそうです。2月初旬に新潟でシンポジウムをやるらしいです。

* 安間 荘

連絡先: [REDACTED]

(株)建設基礎調査設計事務所

富士山のなだれについて興味を持っております。富士山は高さが高いため、気象条件により様々ななだれが発生します。春先きが発生するスラッシュなだれとこれによる森林破壊のことをテーマにフィールド調査をやっています。スラッシュなだれは、雪の性質そのものよりも地盤凍結→不透水化→融雪あるいは降雨による多量の水の供給→斜面に平行な浸透流あるいは表面流の発生といった過程で生じます。総合的なテーマとして面白いのではないかと思います。

* 吉野正敏

連絡先:

筑波大学地球科学系

日本学術会議の第14期の活動の一部として「人間活動と地球環境」に関する特別委員会ができ、小生が委員長となり活動を始めました。「雪崩の発生回数と人間活動の変化との関係」など、会員の方々の研究調査の最近の結果がございましたら別刷などお送りいただければ、委員会活動に反映させたくお願い申し上げます。

* 渡辺成雄

連絡先:

林野庁の大規模表層雪崩研究(林業、土木施設研受託)のお手伝いに引っぱり出され、昨年からまた、古巣の十日町試験地(森林総研)で、卒業した筈の雪いじりをしています。

* 坂野行雄

連絡先:

(株)虎ノ門コンサルタンツ

土木、建築工事に関し、なだれ対策工事の”設計、調査”が得意な会社、並びに担当者氏名等をわかる範囲で結構ですから、お教えます。

* 長谷美達雄

連絡先:

(株)システム・クラフト

私は目下、着雪予測システムを開発中です。雪崩についても「予測する」方向での研究が今後ますます必要になってくるものと思います。基礎的な研究はもちろん必要であり、この方面での会員各位のご活躍が期待されるところでありますが、予測するとなると、予測に使えるデータによって限られる場合があります。つまり、雪崩が起こったことによってはじめて知り得た情報は予測には適しません。予測すると言う立場から雪崩研究のレビューをしてみたいと思っております。微力ながら。

* 塚原初男

連絡先: [REDACTED]

山形大学農学部

PSG工法（雪崩防止工法）研究会の応援を受けて、会員の方々と一緒に、積雪不安定地の緑化試験地の設定にとりかかっています。PW工法・階段工法・杭押し・直播を併用する緑化工法です。

今年は例年になく早めの冬将軍の到来で予定が大幅におくれてしまいました。先日、沢内村へお邪魔した際、雪崩防止林の成功例を遠望させていただきました。皆様のところにそのような試験地がございましたら、ぜひご一報下さるようお願い申し上げます。

* 松葉美晴

連絡先: [REDACTED]

佐々木工業団地日本サミコン研究所

寒冷地の地吹雪対策として防風壁（ブリザドガード）を開発しました。来年一月の「雪工学会」で発表する予定です。雪崩には直接関係ありませんが、機会があれば発表させて頂き、皆様のご意見をお聞かせ願えればと思います。新潟はもうすっかり冬です。

* 松田益義

連絡先: [REDACTED]

MTS雪氷研究所

雪崩問題に限らず、自然災害には

- ① 物理的（理学的）
- ② 対策技術的（工学的）
- ③ 地域社会的（行政的）

の三つの取り上げ方がありうると思います。①の成果を如何にして②と③の問題に連結してゆくかが私たちのテーマとなることが多いのですが、現下は、③への連結に悪戦苦闘しています。

* 山上俊二

連絡先: [REDACTED]

日本道路公団松阪工事事務所

11/1付で上記へ転任しました。引きつつき「なだれ」には縁の無い地区での高速道路作りです。

”枯木も山の賑わい”で引きつつきメンバーの端くれに加えておいてください。

* 後藤良一

連絡先: [REDACTED]

（株）日本リフト・サービス

スキー場安全対策に関する業界活動に関与しております。
よりしくご指導のほど、おねがいします。

* 小林 俊一

連絡先: [REDACTED]

新潟大学災害研

(カナダから)バンクーバーから100Km位にあるホープ山の雪崩常習地をピーター・シェラー氏から案内して貰った時のことです。土塁の減勢工(高さ5m位)が幾つか並んでいました。下の方から見た時は雪崩流路上にある様に見えましたが。ピーターが上から見てみようとのことで、かなり登って下の方を見ると何とその減勢工群は流路の端の方に位置してはおりませんか。ピーターいわく、これは効果ないと。柵口雪崩の時も上から見た方が雪崩流路の確認が容易でした。現場を見る時の忘れてはならない一つのポイントに思えました。

* 名越 昭男

連絡先: [REDACTED]

(株)地球工学研究所

近頃、雪の仕事から若干遠ざかっています。リゾートやレジャー開発関係の話があちこちで浮かび上がり、その筋でか、温泉捜しの仕事がおおくなっています。黒部川の奥で温泉につかりながら、巨大ホウなだれを見物するツアーなんて考えたら面白いと思います。なだれも観光資源にしておもうという訳です。アラスカでは海に出た氷河の末端のカービングを見物するツアーがありますね。

* 大沼 匡之

連絡先: [REDACTED]

長期予報では今冬は大雪、間違いなしとのことだが、今の所高田は10cmほど積もったが消えて、雪なし(12/21)。予報が当たれば雪崩は間違いなしでしょうが。年賀のカードと共に中国、新疆地理研究所の馬維林(北大留学)胡汝(訪日)先生からの手紙で、新疆ウイグル地区の雪、雪崩の研究調査に日本の研究者の協力をもとめたいと所長のWang Shujiからの伝言だとのことでした。なお来日したことのある副所長の甲泉(ジャパル)(ウイグル族)は今、ソ連に留学中である。

* 中島 洋

連絡先: [REDACTED]

NKK、エネルギープロジェクト部

一握りの雪の思い出

新潟県三俣で人工雪崩の発破準備作業を終え、気温の上昇を待っている間、私は斜面上、尾根付近に待機していた。その間、雪質の変化を知るため、ときどき、足下の雪を片手で掴み取っては斜面へ転がりながら大きくなる様子を観ていた。

ところが、何回目かに転がした一握りの雪が斜面を転がる間に大きい雪塊に成長し、自重で崩れたとたん、そこから雪崩になってしまった。

下では(故) 莊田幹夫さんが「自然雪崩発生!」と怒鳴っている。幸いこの雪崩による被害はなかったものの、冷汗をかいだ。一握りの雪でも雪崩の原因となることを直接体験した貴重な思い出である。

* 川田 邦夫

連絡先:

富山大学理学部

1970年頃より雪崩とつき合っています。雪崩対策等の実用面での研究を長くやっておられる諸先輩方から折にふれ有益なご指導をいただきながら、とにかく雪崩の実態というものを知ることに注目してきました。1988年にはノルウェーでのシンポジウムに出席して海外の雪崩研究者と接触でき、大いに勉強になりました。今後は実用面への適用についても積極的に取り組みたいと思っています。最近、地形に及ぼす雪崩の営力等にも関心を持っています。今後ともお教への程お願いします。

